

<インタビュー記事>

平成23年 7月11日

浜松工業会浜松支部編集委員 藤田幸宏

浜松工業会浜松支部総会での記念講演に先立ち、講演前の30分多忙な中、講師であり、浜松工業会会員でもあります、日本を代表する国際的尺八演奏家 直簫流（じきしょうりゅう）尺八宗家 田嶋直士様から貴重なお話をいただきましたので、以下に記載します。

<参考>

田嶋直士氏のホームページ【田嶋直士 尺八の世界】のURLです。

<http://homepage2.nifty.com/tajima-tadashi/>

1. 日時 平成23年 5月21日（土） 15:00-15:30
2. 場所 グランドホテル浜松内 千歳の間（講師控室）
3. インタビュー 直簫流 尺八宗家 田嶋直士氏
4. インタビューア 浜松工業会浜松支部 広報委員 鈴木敏夫氏、藤田幸宏
同席 浜松工業会浜松支部副支部長 竹内栄治氏
ミクムス研究所代表 村上和男氏

5. インタビュー内容

1) 子供の頃について

Q. ご出身はどちらでしょうか？

A. 大阪の堺です。大鳥神社というのがありまして、日本武尊（やまとたけるのみこと）が病に倒れ亡くなり、その時に白鳥になってどこかに飛んでいき、最後に降りたところが堺の大鳥神社というところ。その近くで暮らしていました。

Q. 小中高と大阪の堺で過ごしていて、興味をもったこと、夢中になったことは、どんなことですか。

A. 小さい頃は昆虫採集が好きで蝶々を追いかけていました。野原を走るのが好きで、魚を探ったり、竹で水鉄砲を作ったりして、野や山を駆けずり回っていました。

Q. その頃は音楽に興味を持っていましたか。

A. 音楽はほとんど関心なかったけれども、祭り笛なんかはちょっと好きで吹いていたということはありませんね。横笛のヒョロヒョロという音がただおもしろいから、いたずらしているという程度で、みやげ物屋で買った笛を吹いていました。ですから、音楽はそれほど好きだということはありませんね。

2) 工学部時代について

Q. 工学部に進もうと思ったきっかけはなんだったのでしょうか。

A. これは、数学の点数が良かった、単純にそれだけです。それと柔道をやっています、文系をやっているやつらは女の腐ったやつみたいな、そういうガキの考えがあって、コーラスをやっているだとか、新聞をやっているだとか、そういう文系のクラブ活動は非常に蔑視していました。パンカラ風というのか、そういう雰囲気でしたので、そんなのが影響していたかもしれません。だから、文科系ではなくて理工系の方が好きで得意だというのは、今から思うと全くダメだったということです。

Q. 数学は好きだったんですか。

A. いや、好きというか、点数がよかったものですから、優越感がありました。個人的に習っていた先生が非常にユニークな先生で、幾何と代数を融合化するような問題の捉え方をしていまして、それが非常におもしろくて、点数が良かったというのがありました。

Q. 柔道をやられていたとのことですが。何段ですか。

A. 3段です。高校では初段で、大学の時に3段を取りました。大学院に行ってから隠居みたいなもので、時々道場に行ってはちょっと覗いていました。今はぜんぜんダメですね。

Q. 最初に大阪から静岡に来ての印象はいかがですか

A. その頃は最初の1年から浜松に行く人と、静岡に行く人で2つに分かれていました。単純に、富士山があるんで静岡に来たんです。最初に静岡に来て、授業中に窓から富士山のでっかいやつが見えまして、授業を聞かずに富士山ばかり見ていました。まあ、そんな感じでした。1年間大谷で暮らしました。

Q. 静岡から浜松に来た時の印象はいかがでしたか。

A. そうですね。静岡も浜松も自分の中では似たような印象があって、何か穏やかな、のんびりとした感じだったように思います。大阪と比べると浜松も静岡も同じような感じでした。

Q. 工学部で一番印象に残ったことは何でしょうか。

A. なんでしょうね。そうですね、大学院に行く時にもう勉強はいやだと思ったんです。でも机の上での何かというより、もっと何か興味深そうなことをやりたい、大学院に行ったらできるのではないかと思ったんです。でもそのために受験勉強はもういやだと思ったから、「推薦入学ができるんだっただ行きます。」と教授に言ったのを覚えています。教授からは推薦入学のことは秘密事項だから、結果が分かるまでは言えないとのことでした。成績によって何番までは推薦入学にするとかがあるみたいで、推薦入学であれば受験勉強をしなくてもいいことから、その枠に入っているかどうかを知りたかったんです。その時教授はなんとなく入っているような顔つきをしましたから、勉強をせずに大学院に入りました。大学院に入って最初にテーマを与えられた時に、すごく難しいテーマを与えられて、すごく落ち込んだのを覚えています。こんなところでやっていけるのかと、劣等感と不安みたいなのがかなりのものでした。それが一番の思い出だったかなあ。いろいろあったんでしょうけれど、遠い昔のことだから。

3) 尺八との出会い

Q. 大学4年の時に尺八に出会うわけですが、きっかけはどういうことでしょうか。

A. これは柔道部の2年後輩に変な男がいますね、下駄をはいてガランガランとやっていました。それが尺八をやると言い出したんです。それで父親が若い頃は尺八をやっていたらしく、尺八が押入れの中にあっただのを知っていたもので、休みに家に帰った時にその尺八を借りてきて、その後輩に貸したんです。それでしばらくして何をしてるのかなあと覗きに行ったら、4、5人くらいで尺八を練習していました。化学の先生が尺八の師範で、その先生に尺八を教えてもらっていました。それで僕が笛を吹くみたいに吹いたらピュッと鳴って、一ヶ月くらい前から始めた後輩よりはるかに上手に吹けた気がして、それがうれしくなってそのまま始めたというのがきっかけです。

Q. 上達は早かったんですか？

A. へたでしたね、もうほんとうにへたでした。尺八を教えてくれるというのは、洋楽のような効果的なシステムのようなものはありませんでしたし、指導の仕方もあり良くないんでしょうし、習い方

もへたでした。大学4年から大学院の2年まで3年間やりましたが、へたでしたね、見事にへたでした。どなたところに惹かれたかと言われても、ぜんぜん惹かれなかったんですね。きつない音で、音質も悪いし、なんかもう良いとこなんかひとつもない感じでした。

Q. でも3年間続けたということは何かいいことがあったんですね。

A. なんかあったんでしょうね。フルートを高校の時から始めたんですよ。ですから吹奏楽器というのは似たようなところがあり、それとほくは器用みたいで、いろいろ創意工夫したりして適当に吹いても鳴るんですよ。フルートはおもしろかったです。人生のある時期から音楽が好きになり、音楽ばかり聴いていた時期がありました。クラシックは今でも好きですが、当時は特に好きでした。それで何か楽器をやりたいと思った時に、いくつかの状況があってフルートを始めたんです。自分で教則本を買って、それを読みながらコツコツとやっていました。まあ、これもへたでしたね。

Q. フルートは独学でしたか？

A. 独学でしたね。高校の2年くらいからフルートを吹いていました。大学に入って、最初はとにかく自分は運動部、柔道部ということで、柔道一筋みたいな感じでしたが、4年の時に大学のオーケストラにフルートで入りました。平行して尺八もやっていました。

Q. 鳴らし方はフルートと尺八はどうですか？

A. 似ていますよ。だから簡単に尺八を鳴らすことができたんです。振り返ってみますとフルートはすごくおもしろくて良い楽器だと思います。尺八はほんとうにひどい楽器で、しょうもないと思っていたんですけれども、こっちがちょっとおもしろくなると、こっちの方はおもしろくなるみたいな感じで、シーソみたいな感じですね。

Q. 今もフルートはやられるんですか

A. やりません。もうあんなおもしろくない楽器はやりません、極端ですけども。

Q. 尺八は、基本的に穴が前が4つで、後ろが1つで全部で5つですが、それで音を半音上げたり、下げたり、音が自在に出せるということは、かなりテクニシャンでなければいけないと同時に、自分でいろいろなことができるという楽しみというようなことがあるように思えますが。

A. 自由度がものすごく広い。

広すぎてどうしようもないくらい広い。

ですから自由度をコントロールできない人にはどうしようもないくらい面倒な楽器ですね。

Q. 大きさも今拝見しただけでもたくさんありますし、先生の [Home Page](#) を見ても何十本とありますね。

A. 普通に演奏に使うのであれば10種類は使います。15種類くらいもっています。

Q. この節の数も決まっているのですか。

A. 決まっています。それもまた特殊な世界の話になります。



4) 会社員時代について

Q. 大学院を卒業して、空調会社に入ったとのことですが、空調会社に入った動機はなんですか。

A. 入ったのは大阪のダイキンです。大阪の会社で、自分も大阪の出身ということ、それから父がダイキンの重役と知り合いだった、それくらいの理由です。別にコネで入ったとかはないんですが、どこで

もいから、それだったらダイキンにするかという、それくらいいい加減なものでした。

Q. ダイキン時代のエンジニアとしての思い出は？

A. そうですね。5年いましたが、今から振り返るとつくづく会社人間に合わない性格だなあとひしひし思います。それと理系には全然向いていない、会社ではあまりいい思い出はないですね。いろいろなアイデアをいっぱい出してがんばりましたが、どちらかというとマイナスのことばかりでした。昔の日本の会社は、人間の使い方がヘタクソだとか、効率が悪い、無駄な使い方が多かったです。もうすこし効果的に働かせたら、みんな生き活きと力を発揮するのになあと思いました。だからぼくはもっと自分の自由な時間がほしかった、ムダな時間で後ろ指を差されたということを強く感じています。

Q. その当時から尺八はやられていたんですか。

A. そうです。だんだんとおもしろくなって、休みの日になったら朝から晩まで尺八漬けでした。それで会社生活が5年間もったみたいなものですよ。

Q. 会社は5年でやめられたとのことですが、何かきっかけがあったのでしょうか。

A. これはね、ニクソンショックなんです。円が自由化になった時です。自分が非常に真面目だったんですね、小っちゃい頃から融通がきかなくて、自分はこうあるべきだと決めて、それに邁進してきたという感じがするんです。ところが本人はどうも不真面目な人間で、もっと自由にいきたい人だったみたいで、それを無理やり押さえこんで、国家のために、人のために、会社のためにとがんばってきたんです。けれども、気がついたら日本は強い国になるとるじゃないかということで、自分ひとりくらい電車から降りてもいいでしょうと、そんな感じでやめちゃったんです。

Q. そこからですか、尺八の演奏家になったのは？

A. 尺八の演奏家などとは思わなかったですね。とりあえずまず会社をやめて、それでしばらくの間やりたかった尺八を、もうそれだけやろうという気持ちでした。

Q. 生活は考えなかったんですか。

A. 生活は考えなかった。というか、ぼくは何かやたらに自信があったんです。どこにいても絶対自分一人くらいは家族を養っていけるというような自負が強くてですね、ただもうバーンと放り出してもどこかでそういうものは獲得できると思っていました。だから尺八では飯を食えるとは思わなかったです。こういう芸術活動では生活できないというのは、ちょっと想像しても分かるんです。尺八の演奏家になろうとも、生活できるとも思わなかったですね。

Q. そのころは一人でしたか

A. 一人でした。やめて一年後に結婚したんですね、収入が全くない時に。それもまたけつたいですね。だから最初から演奏家になんて全然思ってなかったですね。

5) 演奏家になって

Q. 演奏家になるのはどういうきっかけでしたか。

A. それはズルズルとなったんです。毎日毎日、自分はもう尺八以外のことで時間を使いたくないと思ったんです。だから、演奏のスタッフのバイトなんかをちょっとしました。楽器運んだりして、だけれども他にコンビニのバイトなんかはやらないでおこうと思いました。

Q. 尺八には何々流派というのがあると思いますが、都山流とかありますが、そういうのには属さなかったのですか。

A. 最初の化学の先生が都山流でした。尺八がおもしろくなったきっかけの一つは、最初のきっかけ

になった後輩の彼が、大阪でなんかの時に一回集まろうじゃないかというので、昔の同好会の連中が集まったんです。その時におもしろい曲を演奏していたんですね、それが虚無僧の音楽だったんです。これはおもしろいなあと言って、その先生のところに連れていけえと言って、連れて行ってもらったんです。その人が竹保流という流派の演奏家、酒井竹翁でした。そこで虚無僧の曲を習い始めたんです。それから相当はまり込んでいったという感じです。

Q. それから自分で流派を起こしたんですか。流派を起こしたいきさつを教えてください。

A. とにかく僕は流派にこだわりたくなかったんです。なんとか流で、この流派はこうでなくてはいけない、これをしてはいけないという、非常にしぼりが強いんです。尺八はなんでもやりたいことをやったらというのがぼくの考えで、そういう縛り付けるような、粹なんかを取っ払いたかった。だから自分流というのを作ろう、なんでもありの流派を作ろうと思い、それにはそれらしい名前をつけようかということです。直簫流の、直（じき）は僕の名前、簫（しょう）は中国の縦笛のことなんです。竹の縦笛、それを簫というんです。中国では洞簫（どうしょう）が尺八のことなんです。だから折角く名前を付けるんだったら、源流に基づいた名前を使おうということです。名前はいかめしいですが、中身はいいかげんです。演奏の一番のメインは、古典の曲である虚無僧の曲が多いです。民謡の世界は全然やりません。自分の中ではあまり民謡は好きではありません。

Q. 尺八は伴奏楽器のように思っていました、そうではないのでしょうか。

A. もともとはお経ですから、お坊さんの修行のためのもので、独奏楽器です。それが江戸時代とかもって後になって、三味線とか琴とかと一緒にいろいろなことをしたりとか、それから北前船なんかで運ばれて、北のほうの江刺追分とくっついて、民謡と尺八と一緒にやったりとか、いろいろな流れがあります。

Q. 先生の [Home Page](#) を見ると、いろいろな楽器と一緒にやられています、

A. 尺八で何かやっているという意識は全くなくて、自分のやりたいことをやる、その手段が尺八だという考えです。

Q. 独奏が多いですか、それともオーケストラとかと一緒にやるのが多いですか。

A. 一人で行ったら独奏しかありませんが、オーケストラとやることもあるし、室内音楽やソプラノと一緒にやるとか、ピアノとやるとか、なんでもありです。

Q. 海外で年間に何日という演奏活動をしていて、すごいバイタリティがあつて、すごいなあと思いました。どこにそんなにエネルギーがあるのかなあと思います。

A. 最近はちょっとゆっくりズムになってきて、前は何にしてもものすごいアグレッシブでしたね。海外はヨーロッパが多いですね。結局海外に行くといっても、演奏の場がなければ行けないわけです。遊びに行って演奏するわけではないので、海外でセッティングがあつて、会場とか、お客さんとか、それから経済的ないろんなことが全部成り立たないと海外に行けませんから、そういうコネクションができないとだめですね。

Q. 先生はお弟子さんというのはいくらいますか。

A. 大阪と横浜と、後はまあ所々にポツポツといます。今度もジュネーブで演奏するんですけども、それはジュネーブにいる僕の生徒さんがセッティングしてくれて、講習会と尺八を作るワークショップとコンサートとを行います。

6) 尺八について

Q. 先生の Home Page を見ると、尺八には竹以外にもプラスチックや木など、いろいろものがありますが、竹だと素人ではなかなか鳴らないのですが、プラスチックだと子供のリコーダのように素人でも鳴るように思えますが、いかがでしょうか。

A. 同じ格好をしていますが、リコーダとは違います。竹だと、能管というのを父親がちょっとやっつけていまして、能管はなかなか鳴りません。普通の篠笛などの薄いのであれば、それでもやれるかなと思います^が、材料がちょっと違うだけで、どの尺八も鳴り易さも、鳴りにくさも一緒です。

Q. 尺八は必ず竹の下の方を使っていますが、途中ではだめですか。

A. 途中でもいいんでしょうけれども、高く売れないですね。それとここの根っこがすごくしっかりとした力をもっているのです、振動と関係があるんです。尺八は材料が振動すると、音がだめになりますから、薄くてぺらぺらしたものだと全然音がだめです。この根っこで締めているのがいいですね。

Q. 真ん中で2本接続していますが、尺八はみんな接続ですか。

A. 昔は一本でしたが、今はもう接続ですね。短いのは1本ですけども、基本的には2本です。不思議な楽器です。

Q. 細かいことですが、中はくりぬいて1本になっていて、漆とか塗っているのですか。

A. どうやって作っているかという、昔は竹藪から竹を適当に虚無僧が切ってきて、それで節を適当に抜くんです。それで吹いてみて悪いのは捨ててしまうわけです。良いのだけ残して置いて、そういうのを何千本、何万本もやっている中に偶然に良いのができるわけです。バランスも全てが良いものが名器として残っているわけです。それをコピーして同じもの作るわけです。粘土細工みたいにして、塗粉と漆を混ぜて、最後に漆で仕上げ、一個づつそうやって作っていくんです。

Q. この穴の大きさは自分で調節するとか、どうやって決めているのですか。

A. 穴の大きさは音程なんです。穴を調整して削ったり、埋めたりして音程を調整します。最近ほとんどしていないのですが、昔はものすごく穴を調整していました。大鉈で削ったりして、音程の狂いを直すんです。穴が大きいほど大きな音が鳴りやすい。穴から空気が抜けますが、穴のところにバックブレスシャがかかって音が鳴りにくくなります。穴が大きいとそこからストーンと空気が抜けますから音が鳴りやすいんです。いろいろな指の組みあわせで倍音を作っていきますが、その倍音が壊れたりすることがあります。一つの音だけですと穴は大きいほうがいいのですが、そうはいかない。全部の音を一つ一つ竹で作って、それを何本も並べたほうがいいのですけれども、そうすると合理的ではないので、一本で共用するとなるといろいろなマイナスの部分が出てきます。ですから、何をとりなのか、機能性をとるのか、折り合い点を見つけていくのです。ものすごく大きく穴を開けている人もいます。でもものすごく指が大きいといけない。指でふさがらなかつたら困りますから、自分のものは自分で調整して削っています。



7) 工学部の学生へ一言

A. 好奇心を持つこと、実践をすること、行動すること、それを是非やってほしいと思います。だいたいそうですが、尺八はこういうもんだという固定概念で決めてしまうじゃないですか。自分も最初

そうでしたが、いろいろなことに興味を持っていくと、ものすごい新しい発見があって世界が広がるんです。だからいつも好奇心をすごく持っています。今はニュートンの物理学の本をいつも持っています。書いてある内容は全然分からないんですが、これと尺八の演奏と結びつけたいと思っています。難しくてぜんぜん理解できないんですが、なんか繋がりそうな気がしてしょうがないんです。ダークエネルギーと尺八の機能世界をくっつけてと思っています。好奇心を一杯もつ、それと実践してみる。だめでもなんでもいいし、見当外れでもいいから実践してみると良いということです。

8) 浜松工業会へ一言

A. また呼んでください。自分の話でなんですけれど、今日の講演は対話形式で行います。話しの中でいろいろ入れて、体験してもらって、そういう何か体験の場ができるといいと思います。こっちから話しをするとどうしても一方通行になります。それだと聞く側と話し側がはっきり分かれてしまう。質問に答えるとか、そういう形だと対話ができ、非常に一体感が出て関心も高まるのではないかなあと、それで今日は対話形式を提案しました。その時にこんな見当外れのことをしゃべったら悪いんじゃないかとか、だめではないかと思わないで、そういう切り口の方がおもしろいし、専門家同士がしゃべってもおもしろくないじゃないですか。素人がとんでもないことをいうと、そこからおもしろい話が出てくるというのが、おもしろいんじゃないかと思います。

<余談>

Q. 肺活量について

A. 肺活量は元気な時に計って3800ccくらいです。尺八は吹いてはだめなんです。肺活量のいる吹き方をしたらだめなんです。考え方が全然違いですね。音を作るために、きっかけを作るというのがあるんですけど、そうするとだめなんです。やればやるほどだめなんです。自然でもないんですね。バランスを作るということが大事なんです。今日演奏を聴いてもらったら、多分すごい肺活量だなあと感じると思いますが、いろいろな歯車がありまして、その歯車が噛んだ時にぱっと力が出る。それが噛まなかったら、すこっと抜けてしまう。そういう時はなんぼやっても、もう息が苦しいばかりで大変なんです。噛んだ時には呼吸をしていない感じになります。息を出していない感じです。

以上